

消失と変容にみる東京都一般公衆浴場の系譜
—路上観察学ゼミ「銭湯調査」との比較をとおして—

37-236130 姜 婷格

0. 21 世紀における銭湯研究

0.1 研究の目的と背景

本研究は、東京都における一般公衆浴場¹（以下、銭湯）の 20 世紀後半以降の変容を、建築様式や入浴空間の増改築とその背景に着目しながら明らかにする。銭湯は日本特有の入浴文化と言われながらも、この半世紀で急速な廃業が進んでいる。しかし他方で、銭湯は多様な観点から注目され続ける存在であり、一部の熱狂的ファンを生むなど、単なる廃れゆく存在ではない。それどころか、この半世紀で数は減ったが、銭湯そのものはむしろ多様化したのではないだろうか。本研究は、新たに発掘した東京大学路上観察ゼミによる 1980 年代末の「銭湯調査」の資料と、現代の実地調査を組み合わせて、その問いを検証する。それにより、伝統建築としての銭湯保存の意義を再考し、今後の銭湯建築の保存、改築、およびリノベーションに関する知見を提供する。

0.2 研究の対象

本研究が扱う銭湯は、物価統制令によって入浴料金が統制されている一般公衆浴場を言う。全国各地に存在するが、銭湯の数が最も多く、独自の建築様式・装飾要素を生み出しつつ発展してきた東京都の銭湯を本研究は対象とする。東京都全域の分析は、東京都浴場組合に加入している銭湯 430 軒（2024 年 11 月時点）を対象とする。加えて、歴史的な変化を追うために、1987 年時点で東京都公衆浴場組合に加入していた銭湯 2120 軒、特にそのうち、東京大学路上観察学ゼミによって調査された 503 軒を重点的に分析する。また、建築毎のミクロな視点から変化を明らかにするために、東京都浴場組合に加入している豊島区的全銭湯 15 軒（2023 年 9 月時点）と台東区的全銭湯 20 軒（2024 年 10 月時点）を対象とする。加えて、網羅性は欠くものの、荒川区の 1 軒および中野区の 3 軒を対象に加える。

0.3 研究の方法

藤森照信氏が率いる路上観察学ゼミの学生メンバーによって、1988 年前後に行われた銭湯調査（以下、銭湯路上観察）の記録用紙を整理し、「Google Street View」を用いて 2024 年時点の現状と比較分析を行った。また、藤森照信氏および中心メンバーの宮武洋吉氏へのインタビューを実施した。さらに、1988 年以前の変化を明らかにするため、台東区 20 軒、豊島区 15 軒、荒川区 1 軒、中野区 3 軒、計 39 軒の銭湯を対象に実地調査を実施し、そのうち 36 軒でインタビューを行った。これらのデータをもとに、図面と全データシートを作成し、類型化およびエクセルでの情報整理を通じて、銭湯の建築様式の変化系譜を明らかにし、改築・建て替えの過程と背景を分析した。

0.4 用語の定義

「宮造」：瓦葺き屋根に唐破風や千鳥破風がつき、社寺建築のような構えの銭湯をいう。「ニュー銭湯」：本論文の造語。宮造をもとに改築した様式、新しさを取り入れ、変化する銭湯という意味で定義する。「ニューウェーブ」：1988

年の銭湯調査に記載されている用語。「様々な工夫」のなされた銭湯のこと。『東京銭湯博物誌』より）「ニューウェーブ」は1988年に見られた様式であるのに対し、「ニュー銭湯」は変容史全体において用いる。

0.5 既往研究

銭湯史については、中野栄三が入浴行為とその浴場についての歴史を起源から終戦直後まで史料分析を通じて明らかにしている²。実態調査については、東京の銭湯を網羅的に調べた事例である路上観察学ゼミの銭湯調査に加えて、町田忍や松本康治らが、主に昭和から現在にかけての全国各地の銭湯を訪問し、外観や内観などの特徴を記録し明らかにしている³。また、山田文男は銭湯の増改築に着目し、木造の銭湯2棟を実測し、戦後に増築された機能について時期別の集計を行っている⁴。

しかし、宮造のビル化など、20 世紀後半以降に進む銭湯の変容に関する研究資料は少なく、特に建築や空間に関する詳細な記述はほとんど見当たらない。

0.6 本論文の構成

本論文は序章および結章を含む全6章から成る。第1章では、銭湯研究の歴史を分析し、特に1980年代末の銭湯路上観察に焦点を当てる。第2章では、銭湯路上観察の具体的な内容を分析し、2024年時点の現状と比較を行い、銭湯建築の変容を明らかにする。続く第3章では、実地調査とインタビューの結果を基に、1980年代以前からの変化を含めて銭湯建築の変容過程を考察する。第4章では、具体的な事例を通じて、銭湯が存続のために採用してきた戦略を示し、結章でまとめと今後の銭湯建築の展望を述べる。

1. 銭湯路上観察の登場

本章では、銭湯がどのように注目されてきたか、また銭湯路上観察が銭湯研究においてどのような位置づけにあるかを探る。

1.1 錢湯研究史

東京都内の銭湯数は 1968 年にピークの 2,687 軒を記録したが、それ以降減少に転じ、多角化などの対策が講じられるようになった。この時期には『公衆浴場史』や『銭湯の歴史』などの文献が出版され、史料や公衆浴場組合の取り組みを中心とした研究が進んだ。1980 年代には、藤森照信や町田忍らによる銭湯の実地調査が行われた。彼らは、東京の銭湯に見られる特徴である宮造、湯気抜き屋根を持つ浴室、外観や内観の装飾などに注目した。

銭湯は、入口から順に玄関、フロントまたは番台、脱衣場、浴室、設備室という基本的な構成を持つ。これに入口の左右が庭、コインランドリー、駐輪場、浴室の奥が住宅になっている配置が多く

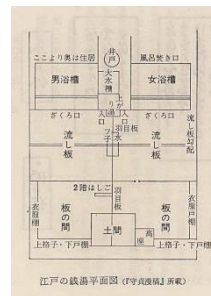


図 1 江戸の銭湯平面図

指導教員 林 憲吾 教授

見られる。基本的な構成については江戸時代から大きく変わっていないと考えられる（図1）。

明治12年（1879）には東京府令として湯屋取締規則が制定され、警視庁令により、「改良風呂」と呼ばれた銭湯に変わり始め、混浴の禁止、浴槽の石榴口の取り払い、浴室内の明るさや衛生面の改善が命じられた。その後、明治時代に行われた規制により、釜の改良や煙突の高さの調整、防火対策として火焚き場と燃料置き場を不燃焼物で改装するという規制が見直された。そして大正10年（1921）には銭湯の床や壁にタイル張りが導入され、昭和2年（1927）には「カラン制」が採用され、現在の銭湯の配置が形成された⁵。

「宮造」と呼ばれた社寺のような構えの銭湯建築が普及したのは関東大震災後だと考えられ、それまでは町屋型だったとされる⁶。宮造導入の経緯については不明であるが、銭湯が寺院の温堂や大湯屋を起源とすることから、蒸風呂の入口の屋根の破風を模したのではないかという説や、大正13年（1924）に岡田信一郎によって再建された歌舞伎座に影響を受けているのではないかという説⁷がある。

第二次世界大戦後に銭湯は急増したが、家風呂が高度経済成長期に普及したこともあって、1960年代末以降、銭湯の利用者数が減少した。しかし同時に、1階または地下を銭湯、上層階を住宅や店舗として活用する「ビル銭湯」という形態が現れた。

1.2 銭湯路上観察の登場

路上観察学は1986年に正式に始まり、街に出て実物を観察することで発見を得る取り組みである。銭湯路上観察は、レトロを愛でる意識と、「なぜ銭湯は神社のような構えであるのか」という疑問を抱き、1987年の東京大学での藤森照信と学生メンバー15名の自主ゼミに端を発した。2年間に渡り行われた複数回のゼミでは、1人あるいは2人で1日あたり7～8軒を訪問し、外観や内観、水温、装飾等の記録を残した（図2）。1989年にはタイル絵で知られる章仙へのインタビューが行われ、計503軒分の調査資料が収集された。その一部は東京大学の五月祭でまとめられ、『東京銭湯博物誌』として販売された（図3）。

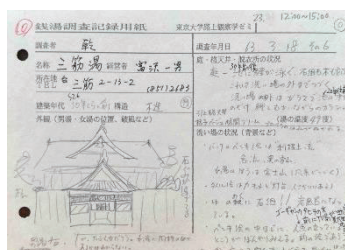


図2 銭湯調査記録用紙



図3『東京銭湯博物誌』

1.3 銭湯路上観察の源流と広がり

銭湯路上観察が始まる以前から、町田忍は1972年よりすでに300軒以上の銭湯を巡り、その姿を写真に記録してきた。また、彼はゼミの学生たちと共に調査し、藤森照信が手掛けた子宝湯の移築にも携わった（図4）。その情熱的な活動は、銭湯



図4 町田忍と藤森照信

路上観察に大きな影響を与えたと考えられる。このような銭湯路上観察の活動は、テレビ東京の「この生テレビ！東京探検」や「週刊読売」関東版のグラビアでも取り上げられ、注目を集めた。

1.4 小結

東京の銭湯建築は江戸時代からの基本配置を維持しつつ、明治以降の規制や災害復興を経て「宮造」を特徴とする独自の形式を形成した。また、1980年代の路上観察学の影響で銭湯の建築や文化への関心が高まり、実地調査が銭湯の再評価を促進したと考えられる。

2. 20世紀後半の銭湯への眼差し

1980年代に銭湯路上観察が見ていた銭湯の世界と未来への展望はどのようなものであったか。そしておよそ40年後の銭湯の姿は怎么样了。それらを検証する。

2.1 銭湯路上観察の調査結果

銭湯路上観察が1988年前後に行った調査では都内の503軒の銭湯が対象となった。本論文では調査記録からその建築様式を「宮造」（図5）、「ビル型」（図6）、「ニュー銭湯」（図7）の3種類に分類した。23区内の調査対象461軒のうち、「宮造」は145軒（31.5%）、「ビル型」は90軒（19.5%）、「ニュー銭湯」は171軒（36.9%）、「不明・廃業」は56軒（12.2%）であった。

2.2 評価基準と銭湯への眼差し

宮造の銭湯は、破風や懸魚などの外観装飾、格天井を始めとする伝統的な木造建築の美しさが魅力とされ、観察対象として高く評価された。記録カードには、「古くていい」「ポリシーが感じられる」といった表現が見られ、タイル絵やペンキ絵も見どころとして重視され、細部まで詳細に記録された。一方で、ビル型やニュー銭湯は観察対象としての関心が薄く、「新しいが見どころなし」「味もソッケもなし」と批判的な評価が多く、単なる入浴施設として捉えられることが多かったようだ。

『東京路上博物誌』⁸や宮武氏へのインタビューによれば、彼らは宮造の銭湯を理想的な姿とし、その衰退を危惧していた。銭湯の廃業を食い止める対策として多角化が行われていたものの、21世紀までの存続は厳しいと予測していた。



図5「宮造」



図6「ビル型」

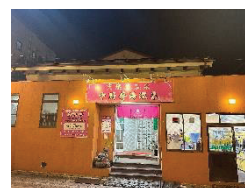


図7「ニュー銭湯」

2.3 銭湯建築の40年間の変容

では、1980年代末に調査された銭湯は今怎么样了。およそ40年間の銭湯路上観察の調査対象の存続状況、それらの建築様式の変化について分析した。

まず、調査対象銭湯の存続率は18.5%であった。「宮造」「ビル型」「ニュー銭湯」ごとの存続率はそれぞれ、9.0%、53.3%、14.7%であった。宮造の廃業が著しく、ビル型が残りやすいことが明らかになった。また、多角化の一環として生まれたニュー銭湯は宮造と比較して存続率は高いものの、ビル型に比較して存続率はかなり低いことがわかる。

続いて、残った銭湯の建築様式の変化は、1988年の記録用紙から判断できないもの（10軒）と2024年現在



図 8 銭湯調査以降の変化パターン

google street view にて判断ができないもの（1軒）は除き、75軒を確認でき、「宮造のまま」「ビル型のまま」「ニュー銭湯のまま」「宮造→ビル型」「宮造→ニュー銭湯」「ニュー銭湯→ビル型」の6パターンが存在したが、様式が変化した銭湯は21.3%（16軒）であった。しかし宮造に限れば、およそ4割がニュー銭湯やビル型に変化しており、廃業する銭湯がある一方で、活力のある銭湯も存在していた。

2.4 小結

21世紀までに生き延びることは困難であるとされていた銭湯は2割未満となったが絶滅することはなかった。むしろビル型は半数近く残り、宮造は残った銭湯だけでなく、一部はニュー銭湯やビル型に変化した。つまり宮造は数を減らす一方で、ニュー銭湯やビル型へ変容する現象が起きていた。こうした現象は銭湯調査時のニュー銭湯やビル型にもあると考えれば、1988年以前からすでにかなり発生していたと考えられる。

3. 建築様式の変化の系譜

これまで1988年以後の銭湯の変化を見てきたが、次に、現存する銭湯の1988年以前の状況を調査することで創業からの建築様式の変遷パターンを明らかにする。

3.1 1988年以前をみる

豊島区（15軒）と台東区（21軒）の現存する全銭湯と他4軒を実地調査し、そのうちの36軒にインタビューを行った。台東区は一人当たりの銭湯数が都内で最も高く、宮造の数も多い下町風情が残る地域である。一方で、豊島区にはビル型とニュー銭湯のみが存在し、都市化が進んだ雑多な地域である。異なる特徴を持つ2つの地域において全軒の銭湯を調査することにより、多様な変遷パターンを記録し、銭湯の建築様式の変化をより網羅的に記録した。また、実地調査とインタビューより、銭湯建築の建て替え・改築・改修の履歴を明らかにした（図9）。

3.2 建築様式の変化の系譜

この結果より、創業時の姿不明を除き、調査対象の25軒中24軒が、創業当初は宮造であったことが明らかになった。それらは図10のいずれかのパターンを経て現在に至っている。つまり少なくとも調査対象地では、銭湯建築は宮造からはじまり、その一部が改築や建て替えを通して別の様式を変え、多様化しながら生き残ってきたと考えられる。

3.3 変化にみる時代ごとの特徴

個別の事例は次章で詳しく取り上げるが各銭湯での調査結果を踏まえると、銭湯建築の変化パターンには、時期ごとに特徴的な傾向がみられる。

宮造の場合は以下の時期だと考えられる。1945年～1963年：宮造への建て替えが集中した時期であり、戦後の焼失からの再建がピークを迎えた。1980年～1996年：宮造の改築が活発化した時期であり、外装や内装の更新、フロント式への転換、庭の駐車場・コインランドリーへの転用、サウナ設備の導入、浴槽の増設といった機能的な改良が進

められた。2010年前後：再び改築が多く見られ、1980年代の改築業者とは異なる。

ビル型銭湯の場合は以下の時期に特徴があると考えられる。1949～1968年：一階を銭湯、二階を住居とした構造であり、銭湯の天井が高いという特徴があり、レンガ仕上げやガラスブロックの装飾が取り入れられた。1986年～1992年：銭湯に加えて商業施設を上層部に併設する建物が増加した。銭湯の新たなあり方を求める傾向があり、従来の銭湯専門業者以外の建設・設計会社が手掛ける例も見られた。また、上層部を住居とするビル型銭湯の変遷に傾向が見られ、かつては3～4階建てで上層部を住宅とするシンプルな形態が多く見られたが、近年では、上層階をすべてマンションとする高層のビル型銭湯が増加している。これには等価交換方式による建て替えが含まれるほか、ビル型銭湯に特化した業者が出現したと考えられる。

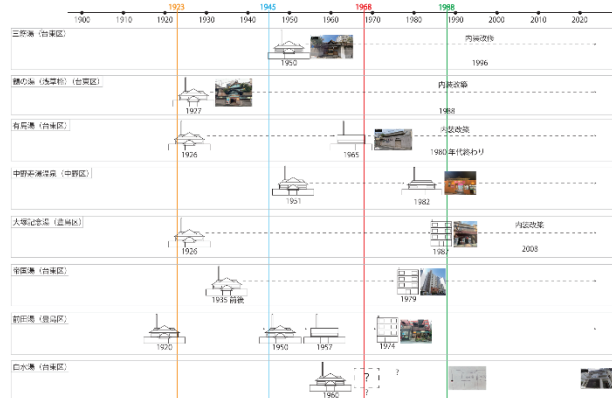


図 9 銭湯建築の建て替え・改築・改修変遷図

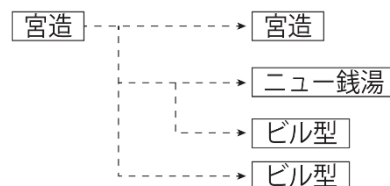


図 10 建築様式の系譜

3.4 小結

銭湯建築の様式を創業までたどると、戦後東京の銭湯は宮造に行き着き、その一部が別種の様式に変わることによって多様化しながら存続してきた可能性が示唆された。

4. 銭湯建築の変容とその背景

ピーク時に比べれば2割未満まで数を減らした銭湯だが、あるものは宮造を維持し、あるものは宮造から変容を遂げて存続してきた。本章は、それら銭湯がどのように存続してきたかを、建築の観点から考察し、その手法と背景を明らかにする。

4.1 宮造のまま存続

宮造のままとは言え、現存する銭湯の多くにはさまざまな手入れや改築がみられた（図11）。

三筋湯（台東区）では先代が大事にしてきた立派な庭や鯉を維持するために手入れをし続けており、鶴の湯（台東区浅草橋）では利用者数の変化に対応して内壁をセットバックさせ、庭や脱衣場、および浴室の広さを調整する改築を行ってきた。近年はデザイナーズ銭湯⁹へのリノベーションが増加している中、天神湯（台東区）は2013年全面リノベーションを行った際に、従来の形態と装飾をそのまま

残す形を取った。従来の形態を大事にしながら手を入れることで宮造銭湯の魅力を維持していた。

さらに、時代の潮流を積極的に取り入れてきた銭湯もある。曙湯（台東区）は浴室内に半露天風呂を増設するとともに、従来のペンキ絵に代えて、地域の文化を表現したラッピング絵を背景画に使用し、ペンキ絵師の減少問題とメンテナンスの難しさをカバーしている。鶴の湯（台東区浅草）はサウナや浴槽の種類を増設し、庭をコインランドリーと駐輪場に改築し、時代の変化に応じて改築を行ってきた。

また、燕湯（台東区）は家族経営という銭湯従来の経営方式と建築形態を維持するために、脱衣場の上部を改築し、二階建ての住居を増築している。

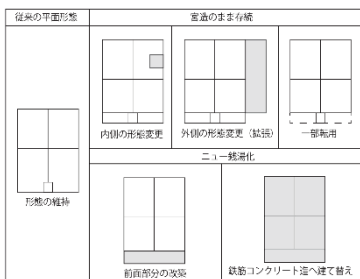


図 11 平面形態の変容パターン（宮造・ニュー銭湯）

4.2 宮造のニュー銭湯化

中野寿湯温泉（中野区）は、フロント化に際して、従来の破風付きの入口と庭のスペースを、フロント、コインランドリー、休憩スペースが一体となった空間に 1982 年に改築した。さらに寿湯（台東区）は屋外空間を活用し、浴室を段階的に拡張してきた。

一方、有馬湯（台東区）は、耐火性能を上げるため、鉄筋コンクリート造の平屋に 1965 年に建て替え、モダンなデザインを取り入れた。

ニュー銭湯には、機能性への迫及のみならず、デザインと浴室空間へのこだわりと工夫が見られる。

4.3 宮造のビル化

ビル型銭湯には、ワンフロアで構成される銭湯と、複数階を利用する多層式銭湯の 2 種類が見られた。

ワンフロア銭湯には、上層部に住居を併設するものと商業施設を併設するものがある。例えば、平和湯（豊島区）は 1986 年のビル化の際、他の階にダンス教室やサウナ施設などを取り入れていた。大塚記念湯（豊島区）は、一階を銭湯として、二階にはサウナ施設を併設している。弁天湯（台東区）は、土地の等価交換により 1986 年にビル化し、上層部は分譲マンションである。

多層式銭湯には、主に入浴機能を提供するものと、商業機能を兼ね備えたものがある。やすらぎの湯ニュー椿（豊島区）や陽だまりの泉菰の湯（台東区）はその代表例で、関西の公衆浴場を参考にビル化を行い、スーパー銭湯のような多機能を取り入れたりしている。

〈注釈〉

¹ 銭湯。物価統制令により入浴料金を都道府県毎に統制する公衆浴場。

² 中野栄三.『銭湯の歴史』.雄山閣,1970.

³ 町田忍.『銭湯へ行こう・旅情編：一〇年一〇八九軒行脚の記録』.TOTO 出版,1993.

⁴ 山田文男.「木造銭湯について戦前に建設された 2 棟の建物における現況調査(木造,建築計画 I)」.『学術講演梗概集, E-1, 建築計画 I, 各種建物・

また、ビル型銭湯にも外側へ拡張する例があり、天然温泉湯どんぶり栄湯（台東区）は、屋外空間を活用し、1995 年から 2024 年の間に何度も浴室の増築や新しい入浴方法を取り入れ続けている。

建て替えに際して、珍しい手法や保存の工夫が取られた銭湯もある。富久の湯（台東区）は 1955 年のビル化を進めるに当たり、宮造の庭と浴室部分はそのまま残した。帝國湯（台東区）は、ビル型でありながらも、番台や男湯と女湯の仕切り壁といった従来のインフィル部分をそのまま保存している。白水湯（台東区）は、閉業の危機に直面したものの、2024 年のチェーン化によって経営を再開した。

4.4 宮造のニュー銭湯化のちビル化

前田湯（豊島区）は戦後に宮造から鉄筋コンクリート造の平屋に建て替えたのち、上部にマンションを増築してビル化した。白水湯（台東区）はチェーン化により様式の変化時期など不明であるが、銭湯路上観察の記録によれば、一度ニュー銭湯化し、現在のビル型に建て替わった。

4.5 小結

現存している各銭湯の取り組みを見ると、たとえ宮造であっても、時代の変化への適応や新しいデザインや設備を積極的に取り入れる姿勢が随所に現れている。だが、皆が必ずしも「新しさ」だけを追い求めている訳ではないことも明らかになった。たとえビル型であっても、様々な工夫を通して宮造銭湯に見られる伝統的な要素を継承するなど、新しさと伝統の魅力の融合がさまざまな銭湯に見られた。単なる衰退では切り取れない、生き生きとした銭湯の姿がそこにはあった。

5. 結章

東京都の銭湯建築は、関東大震災後、「宮造」という様式が広まり、多くの人々に愛される存在であったが、1970 年前後からその数は減少し続けている。しかし、銭湯路上観察を生み出したように、銭湯は多くの人の関心を絶えず燃やし続けている。そんな銭湯が生き続けてきた理由は、変化だけではなく継承にあった。宮造の銭湯は時代の変化に応じて変容しても、従来の宮造銭湯として大事にされてきた価値はさまざまな形で引き継がれ、今なお見え隠れしながら息づいている。近年では、これまで閉鎖的だった銭湯業界において、新たに銭湯の設計を手掛ける業者が登場し、銭湯のチェーン化など、新たな取り組みも見られる。銭湯は減少の一途を辿りながらも、同時に進化し続ける。

本研究では史料を用いた検証に限界があったため、変容を特定する上で解明できなかった点が多く残された。また、台東区と豊島区を事例に、銭湯建築の変容を明らかにしたが、都内含む全国各地の事例研究に応用することで、より広範な解明が期待され、変容の過程における継承の価値や手法について具体的に論じることが可能となるであろう。

〈図版出典〉

図 1:『公衆浴場史』.全国公衆浴場業環境衛生同業組合連合会,1972.(2025/1/6)

図 2: 東京大学路上観察学ゼミ「銭湯路上観察」三筋湯の記録カード.1988.(2025/1/6) 図 3: 東京大学路上観察学ゼミ.『東京銭湯博物誌』.1988.(2025/1/6) 図 4:街角で「いい湯だな!」.東京人,2001,169,p.36-41.(2025/1/9) 図 5,6,7:筆者撮影. 図 8,9,10,11,12: 筆者作成.

地域施設, 設計方法, 構法計画, 人間工学, 計画基礎』.2007,(2007), p.701-702.

⁵ 全国公衆浴場業環境衛生同業組合連合会.公衆浴場史.1972,549p

⁶ 町田忍.懐かしくて新しい銭湯学:お風呂屋さんを愉しむとおき案内.メイツ出版,2021,112p,978-4780425291

⁷ 藤森照信氏へのインタビューより.

⁸ 藤森照信.『東京銭湯博物誌』.王国社,1988.

⁹ 今井健太郎.『銭湯空間』.株式会社 KADOKAWA,2020.